

Kyuma 1999

Kyuma Taiken, “bheda and virodha.” *Dharmakīrti’s Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy. Proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference, Hiroshima, November 4–6, 1997*. Shoryu Katsura (ed.), Wien, 225–232.

Pind 2015

Ole Holten Pind. *Dignaga’s Philosophy of Language: Pramāṇasamuccayavṛtti V on anyāpoha*, Wien: Beitrage Zur Kultur-Und Geistesgeschichte Asiens.

江崎2005

江崎公児「ダルマキールティによる差異の定義について」『比較論理学研究』2, 39–46.

小川1986

小川英世「Kaundabhaṭṭa の bhāvapratyaya 論」『広島大学文学部紀要』第45巻, 94–118.

小川1988

小川英世「BHĀVAPRADHĀNA-NIRDEŚA について」『印度学仏教学研究』第37巻第1号, 67–70(L).

北川1965

北川秀則『インド古典論理学の研究—陳那 (Dignāga)の体系—』東京：鈴木学術財団.

立川1992

立川武蔵『はじめてのインド哲学』東京：講談社.

秦野2019

秦野貴生「ダルマキールティのアポーハ論における ākṣepa 及び pratikṣepa の考察」『印度学仏教学研究』第68巻第1号, 169–173(L).

(令和4年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号22K00063による研究の一部)

- 終わる名詞語幹（名詞・形容詞）とともに、“-*tva*”や“-*tā*”（=*taL*）などの *bhāvapratyaya* を付した名詞語幹（名詞・形容詞）を用いる表現が多用される。インドの文法学派における *bhāvapratyaya* の詳細な解説は、小川1986や小川1988によってなされている。
- 2) 立川1992: 98参照。インド論理学の特集については北川1965: 3-9を参照。
- 3) ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派などでは「内属」（*samavāya*）といわれる。
- 4) *ekasyārthasvabhāvasya pratyakṣasya sataḥ svayam / ko'nyo na dr̥ṣṭo bhāgaḥ syād yaḥ pramāṇaiḥ parīkṣyate //PV 1.43//*
- 5) 仏教論理学派において〈排除〉（*apoha*）が普遍（*sāmānya*）の働きをなすことは、Pint 2015を参照。
- 6) Kyuma 1998及び江崎2005参照。
- 7) Ishida 2011: 3; 60のダルモータラ（法上, 740-800）の説明とその翻訳を参照。
- 8) Cf. PV 1.61 and PVSV thereon.
- 9) 本節で扱う箇所については Eltschinger et al. 2018による英訳研究が刊行されている。また、秦野2019によっても取り上げられている。

### 略号

- PV 1 Pramāṇavārttika (Dharmakīrti), chapter 1 (svārthānumāna): see PVSV.
- PVSV Pramāṇavārttikasvavṛtti (Dharmakīrti): Ed. R. Gnoli, *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti. The First Chapter with the Autocommentary*. Roma 1960 (Serie Orientale Roma 23).
- PVSV<sub>Ms</sub> Pāṭhaṇa (Patan) Manuscript of PVSV.

### 参考文献

- Eltchinger et al. 2018  
 Eltschinger, Vincent, John Taber, Michael Torsten Much, and Isabelle Ratié, *Dharmakīrti's Theory of Exclusion (Apoha). Part I. On Concealing. An Annotated Translation of Pramāṇavārttikasvavṛtti 24,16-45,20 (Pramāṇavārttika 1.40-91)*. Studia Philologica Buddhica 36. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- Ishida 2011  
 Hisataka Ishida, *Dharmottaras Pramāṇaviniścayaṭīkā zum auf der Realität basierenden logischen Nexus*, Universität Wien [<http://othes.univie.ac.at/13375/>].

る。このようにダルマキールティは、同一基体性を用いた表現の方が、他の規定に対して開かれていると考えているようである。最初の *bhāvapratyaya* が用いられた表現に対しては、以下のように述べられる。

まさにこれゆえに、先の例では、別の差異 (*bheda*) が捨て去られているから、語の適用に、同一基体性も、限定・非限定関係もない。“*gotvam asya śuklam*” というように。

*ata eva pūrvatra pratikṣiptabhedāntaratvāc chabdavṛtter na sāmānādhikaraṇyaṃ viśeṣaṇaviśeṣyabhāvo vā – gotvam asya śuklam iti.* (PVSV 33,14–16)

ここでは、*bhāvapratyaya* を用いた場合には、表現は完結しており、それ以上、排除 (*bheda*) を目的・機能とする別の語の適用はないことが示されていると考えられる。

#### 4. おわりに

本発表では、仏教論理学を大成したダルマキールティの言明を中心に、インド仏教の思想家が基体・属性の関係をどのように考えているか考察した。仏教論理学派では、語や概念は実在に直接触れないことが定説とされるが、基体・属性の関係は認識上のものであり、実在の世界において基体・属性の明確な区別は認めていないことが推測される。

一方、サンスクリット語の *bhāvapratyaya* (様態接辞) は慣例的に用いられるものであるため、ダルマキールティもまたそれを説明する必要があった。そこでは、聞き手がどの程度の情報を必要としているかに、さらにはそれを受けた話し手 (話者) の意図に、言語表現の違いの原因を認めているようである。

#### 註

1) サンスクリット語では、属格 (*śaṣṭhī*) または時に処格 (*saptamī*) で  
(8)

*bhedāntarapratikṣepāpratikṣepau tayor dvayoḥ /*

*saṅketabhedasya padaṃ jñātrvāñcānurodhinah //PV 1.61//*

この説明のみでは必ずしも明瞭ではないため、以下の具体的な説明をみてみたい。

この理解者 (=聞き手) が、それ以外の排除の存在を期待せず、或る個物に対して、馬の排除のみを知ろうと欲する時 (=「馬でない」ということのみを知ろうとする時)、それに応じた事柄を理解させるために、それに応じた言語協約 (=語と意味の関係) が作られた言葉によって、[その理解者は、] 理解させられる。「これには〈非馬性〉がある」(*anaśvatvam asyāsti*) と。

*yadāyaṃ pratipattā tadanyavyavacchedabhāvānapekṣaḥ piṇḍaviśeṣe*  
*śvavyavacchedamātram jijñāsate, tathābhūtajñāpanārthaṃ tathā-*  
*kṛtasāṅketena śabdena prabodhyate – anaśvatvam asyāstīti. (PVSV*  
*33,9-12)*

この場合は、第6格 (*śaṣṭhī*, いわゆる属格) とともに、*bhāvapratyaya* が用いられるケースである。この場合は、馬以外の排除は意図されていないと言われる。次に、*bhāvapratyaya* が用いられない場合が説明される。

しかし、他の排除に無関心というわけではない者 (=聞き手) が、その [対象] を知ろうとするとき、その場合、その同じ、別の排除を捨て去らない〈馬の排除〉に対して、[理解者に] 応じた形で明らかにするために、「これは非馬 (馬でないもの) である」(*anaśvo 'yam*) と用いられる。

*yadā punar vyavacchedāntarānirākāṅkṣas taṃ jñātum icchati,*  
*tadā'parityaktavyavacchedāntare tatra evāśvavyavacchede tathāprakā-*  
*śanāya prayuñjate – anaśvo 'yam iti. (PVSV 33,12-14)*

ここでは、*bhāvapratyaya* は用いられないが、この場合、さらに続けて、この「馬ではないもの」(非馬) に対して、別の排除 (*vyavacchedāntara*) を知らしめ、他の規定 (=修飾) をすることが可能とな

*na vai kācid anyānityatā nāma, yā paścān niṣpadyeta. sa eva hi bhāvaḥ kṣaṇasthitidharmā'nityatā. vacanabhede'pi dharmidharmatayā nimittaṃ vakyāmaḥ. (PVSV 21,3-6)*

ここで述べられるように、ダルマキールティは、実在において、〈もの〉(bhāva) とその属性である「無常性」を存在論的に区別していないことが分かる。この理解に立った上で、「〈もの〉は無常性である」(bhāvo 'nityatā) という表現さえ、可能になるのである。このような基体・属性の理解は、基体である〈もの〉と一体（同一性）の関係にある無常性という属性に限らず、同一性（それを本質とする関係 iādātmya）の関係にあるすべての基体・属性に適用できるものであろう。

ただし、サンスクリット語を使用する以上、“-tva”や“-tā” (tal) といった bhāvapratyaya（様態接辞）によって明確に表現される基体・属性の関係を無視するわけにはいかない。その点については、ダルマキールティ自身が「後に述べる」と記している箇所を、次節で取り上げることとしたい<sup>8)</sup>。

### 3. ダルマキールティの bhāvapratyaya の説明

前節で、ダルマキールティが、特に同一性（「それを本質とする関係 iādātmya）にある基体・属性について、実在のレベルにおける区別を認めていないことを確認した。その理解に立てば、「〈もの〉は無常性である」(bhāvo 'nityatā) といった、およそ正統インド哲学諸派には認められないような表現も、可能とされる。しかしながら、サンスクリット語を用い、その表現手法に従うならば、基体・属性を表す表現について、なんらかの説明を与えなければならない。その点を、ダルマキールティは以下のように説明する<sup>9)</sup>。

他の差異（＝排除）を捨てるか捨てないかが、これら2つ〔の、基体と属性を表す語〕に、理解者（＝聞き手）の欲求に従った〈言語協約の違い〉〔が見られること〕の原因である。

のひとつに、仏教論理学派の定説として重要な「瞬間的存在（刹那滅）論証」を論じることが念頭に置かれていることは、看過されてはならないと思われる<sup>7)</sup>。

ここで、ダルマキールティは、「無常性」(*anityatā*)という属性(*dharma*)を持ち出し、議論を進めている。「無常性」は、一見、否定的な性質を表すものであることから、存在としての〈もの〉(*bhāva*)とは矛盾する(*viruddha*)ようにも見える。さらには、ニヤーヤ・ヴァイシェシカなどのインド正統哲学諸派の理解では、「無常性」(*anityatā*)とは、〈もの〉が壊れる場合に、ハンマーなどの外在的要因によって後から付加されるものと捉えられるものでもある。ここでは、上記の2点は直接問題とはされないものの、ダルマキールティは以下のような反論を想定する。

【反論】[もし、無常性という属性が、基体である〈もの〉と]別の〈もの〉を原因としていなくとも、[〈もの〉が]生じる時点で、無常性は成立していないので、それ(=基体となる〈もの〉)を本質としていない(=それと一体でないこと)は変わらない。  
*nanv anarthāntarahetutve 'pi bhāvakāle 'nityatāniṣpattes tulyātatsvabhāvatā. (PVSV 21,2-3)*

この反論は、實在論的な立場を取る対論者が、基体(*dharmīn*)が成立する時点と、それに付属する属性(*dharma*)の成立が、一瞬(1刹那)という短い間とはいえ、時間を異にすると考えることに由来している。これに答えるものとして、ダルマキールティは、「無常性」がいかにして成り立つか、以下のように説明する。

決して、後の時点で成立するような、[基体とされる〈もの〉とは]別の「無常性」というものはない。というのも、その同じ〈もの〉(*bhāva*)が、1瞬間だけ成立するという性質(*dharma*)を持つ場合に、無常性(*anityatā*) [と呼ばれるの]である。基体(*dharmīn*)・属性(*dharma*)としての言語表現の違いについては、後に述べるであろう。

り方が前提とされているか、必ずしも明らかではない。そこで、同じ『知識論評釈』及び自注の他の文脈を参照したい。

ダルマキールティは、同書において、一般的な問題として〈もの〉の「区別」(*bheda*)を論じている(PV 1.33ab and PVSV thereon)。その文脈では、或る属性(*dharma*)が、別の〈もの〉(*arthāntara*)を原因としているなら、その属性はそれが属する基体(*dharmin*)とは全く別の存在となり、基体・属性間の必然的な関係が全く成立しなくなると論じられる。ここでは、同書の文脈から、基体として「生地・布」(*vāsas*)と、それに後から付着することになる「染料」(*rāga*)が念頭に置かれていると見做せる。

というも、[ある]属性(*dharma*)が別の〈もの〉を原因としているなら、それ(属性)は[それが属する基体(*dharmin*)とは]全く別のものとなるだろうから。

*arthāntaranimitto hi dharmāḥ syād anya eva saḥ* / (PV 1.33ab)

この議論に引き続き、一般的定義として、諸々の〈もの〉(*bhāva*)の「区別」(*bheda*)と〈もの〉の「区別の原因」(*bhedahetu*)について解説される。その説明をここで確認しておこう。

周知のように、これこそが、諸々の〈もの〉(*bhāva*)の区別(*bheda*)ないし(諸々の〈もの〉の)区別の原因(*bhedahetu*)である。[すなわち、]矛盾した属性の結合(*viruddhadharmādhyāsa*)と原因の区別(相違)である。

*ayam eva khalu bhedo bhedahetur vā bhāvānām, viruddhadharmādhyāsaḥ kāraṇabhedaś ca.* (PVSV 20,21–22)

ここでは、基体や属性に限定することなく、一般論として、〈もの〉の区別(*bheda*)とは「矛盾した属性との結合」(*viruddhadharmādhyāsa*)であり、〈もの〉の区別の原因(*bhedahetu*)は、その[生じる]「原因の相違」(*kāraṇabheda*)にあることが述べられている。

以上の言明は、ダルマキールティの定義としてしばしば引用され、研究者にも言及されているが<sup>6)</sup>、ここで上記の定義が提示される目的

檜」または「あの林檎は赤い」と言語表現する場合に、林檎の甘さや新鮮さまでは表現（および理解）されないこと、「あの山に火がある（はずだ）。煙が見えるから」といった推論を行う場合にも、山にある火の色や勢いなどまでは理解されないことから、ある程度納得されるかと思われる。

ダルマキールティは、本稿の冒頭で触れた基体・属性の関係を念頭に置いて、推論が実在を捉える場合の問題点を、以下のように指摘する。

そして、推理によって実在 (*vastu*) が理解される場合、ひとつの属性 (*dharma*) が確定されたならば、すべての属性が把握されることになってしまう。[しかし、] 排除 (*apoha*) にはこのような過失は当てはまらない。

*vastugrahe 'numānāc ca dharmasyaikasya niścaye /*

*sarvadharmagraho 'pohe nāyam doṣaḥ prasajyate //PV 1.46//*

ここで、もし推理によって実在が理解されるならば、推理によって実在の或るひとつの属性が確定された場合に、実在におけるその一体性（ないし結合関係から）、すべての属性が理解されることになってしまうと指摘されている。この指摘は、実在論的立場を取り、基体・属性の関係を受け入れる者にとっても、ある程度の説得力は有しているように思われる。

最後に、語の意味ないし働きとして「排除」(*apoha*) を考えるなら、この過失は当てはまらなると述べているが、これは、「語の意味は排除 (*apoha*) である」というダルマキールティの定説であり、アポーハ論と呼ばれるものである<sup>5)</sup>。

## 2. 実在における基体・属性の成り立ち

前節では、推理という言葉を伴った概念的認識において、実在との乖離が指摘されていた。しかしながら、以上の議論だけでは、ダルマキールティによって、実在の世界においてどのような基体・属性の在

ただし、上記のような基体・属性の理解に対し、インド仏教の思想家は、必ずしもその枠組みをそのまま受け入れているわけではない。仏教認識論・論理学派（以下「仏教論理学派」）のディグナーガ（陳那、480-540頃）やダルマキールティ（法称、7世紀頃）によって、基体・属性の区別は、概念上のものとされた。ダルマキールティは、『知識論評釈』（*Pramāṇavārttika*, 以下 PV）第1章に対する自注（*Pramāṇavārttikasvavṛtti*, 以下 PVSV）で、ディグナーガの説明を引用しつつ、以下のように述べている。

同様に、（ディグナーガも）述べている。「このような、まさにすべての推理手段（＝理由・根拠となる属性）や推論対象（＝推理される属性）という取り扱いは、認識に現れた基体・属性のあり方による」と。基体・属性としての区別は、対象（に基づくもの）ではないけれども、知の形象において作られたものである。  
*tathā cāha – sarva evāyam anumānānumeyavyavahāro buddhyarūḍhena dharmadharmīnyāyēneti* (PVSV<sub>MS</sub> : °*bhedēneti* PVSV). *bhedo dharmadharmīṭayā buddhyakāraḅṛtaḅ, nārtho 'pi*. (PVSV 2,22-3,2)

ただし、上記の説明は、推理という概念操作（＝思考）に限定されるものと考えられるかもしれない。本稿では、この問題を扱うダルマキールティの議論を取り上げ、インド仏教の伝統において基体・属性の関係がどのように解釈されているか、見ていくこととしたい。

## 1. ダルマキールティの理解

ダルマキールティは、人が対象を捉える方法として、実在をそのままに捉える「知覚」（直接知覚 *pratyakṣa*）と、対象を間接的に捉える「推理」（*anumāna*）の2種を考えている。このうち、推理は、言葉と結びつき、概念を有した認識とされる。ダルマキールティは、『知識論評釈』第1章において、知覚が実在を全面的に捉えることは認めつつも（PV 1.43）<sup>4)</sup>、言語表現を伴った概念的認識である推論は、対象の一部を捉えるに過ぎないと述べる。このことは、私たちが「赤い林

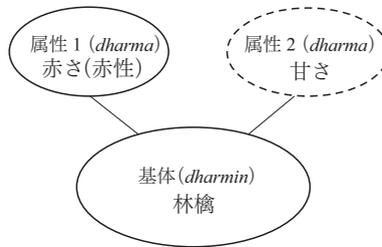
# インド仏教思想における 基体・属性の理解

——ダルマキールティの考察を手掛かりとして——

石 田 尚 敬

## 0. はじめに

インド思想において、存在を基体（ダルミン *dharmin*）及び属性（ダルマ *dharma*）の関係で捉えることは、伝統的かつ基本的な発想方法であったと言える<sup>1)</sup>。ヒンドゥー教正統哲学に含まれるニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派などにおいて理解される基体・属性の関係は、以下のように図式化される<sup>2)</sup>。



ここに見られるように、基体である「林檎」に、属性である「赤さ（赤性）」や「甘さ」が所属していると捉えられる<sup>3)</sup>。この関係は、推理においても用いられ、基体である林檎にある「赤さ」という属性から、まだ知覚（認識）されていない「甘さ」という属性が推理されるといった形で説明される。